

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
俳句	月の雨倉庫濡らして煉瓦色	夕風や吃水深くロシア船	大花火砂にずり込む尾髀骨	蟬生まるかつて空爆ありし土地	虫送り農家の嫁の産み止め児	山霧に峠の地蔵濡れて立つ	おぼろ月ひらり昆布の夜を編む	祭り笛芭蕉も聞きし月の宿	芭蕉浜母とこぎしを秋思へり	母とこぎ色が浜まで秋かすむ	知らぬ間に月影遠ざかり夜ぞ増えにける	同じ月や母祖も今宵秋を見てをらむ	血染め月美しさ裂く恐怖かな	月は姫秋風に揺れて夜涼し	かく細き昼の眉月一葉忌	悲しみを呑み込みし日の鰯雲	三戸減り五戸減り村の秋祭	自画像に足すは何色菊日和	名月や高貴な光放ちけり	風鈴や小さき部屋に良き音色	夜濯の干す隙間から十三夜	来客の迎え打水乾きけり

※住所、氏名省略

※応募順の掲載

No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
俳句	可惜夜や月は縮羅の波に揺れ	木洩れ日と戯るごとく滝しぶき	農を継ぐ生家に誇り盆の月	産んで来て荷台にゆるる白日傘	花莫蔭を赴任の夫の荷の中へ	ふるさとの薨照らして月涼し	再会を約し握る手秋の蝶	夏芝にスマホ見せ合ふ円座の子	娘が笑ふ月にうさが居るなんて	立ち飲みで交わす湯飲や月明り	月代や過疎の村にも灯のともる	四十度とて一服もなしコンバイン	空蟬に魂のみが残りをり	鰯雲母が手編の雲かとも	終戦日海軍帽の鍰褪せて	八十年白檀の沈月透くる	ゆくりなき風に稲穂のささめける	小鳥来る大峡谷の雄々しさに	大いなる胃袋群るる芋煮会	独り居を虫の音に取り巻かれたる	月の出を像の翁と待ちにけり	月代や水音高く鯉はねる

No.	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66
俳句	ヴィオロンの調べに登るけふの月	沈鐘の句碑のまろびや十三夜	名月や今宵は君に告白を	月蒼く飢えたる国に生きる民	夜回りの柝の音響き月を連れ	友来たる愚痴で終わりし月見酒	相寄りて月の雫や女傘	外灯に影濃き月の雫かな	落つれば一湾鏡や気比の月	稲架がけの残りすくなき良夜かな	妻さそひ古庭にみるや今日の月	名月や自転車のせし駐車場	生あり一家をせおふや蝸牛	時とし無惨薄きよろひやかたつぶり	月天心翁の像の無表情	氣比祭いつもの場所にいろいろ屋	月明かり海の光を取り入れる	米寿に玄孫おんぶ秋の夕	新米を取れば古米又ふえる	盆踊りお国じまんをおりこんで	雑草と云はれて伸びる炎天下	繁茂してここすべりひゆ畑ならず

88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	No.
更待の月の高さよ明るさよ	曳く杖に慣るるは淋し草の花	裸灯に溺れ溺れず火取蟲	空蟬の縊れる物の哀れさよ	風鈴も聞こえぬ猛暑昼下がり	ちやぶ台を笑顔で囲むおぼろ月	功も名も成らず卒寿に虫時雨	名月を止むる杜の大櫓	一風を作る夕べの稻雀	名月に少し酔ひある家路かな	覗き見る月下のゴディバ王妃騎馬	月今宵漱石ならばどう口説く	白靴の紐ひらがなのやうに解く	不器用が器用に生きて秋暑し	お月見はススキが無くてアワダチ草	月明かり川床洗うモクス蟹	テレビより流れる軍歌盆の月	不器用に生きし米寿や盆の月	丸の無き九月の暦恙なく	恙なく終へし一ト日や髪洗ふ	芭蕉曾良きつと夕餉にとろろ飯	満月や升にあふるる大吟醸	俳句

No.	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110
俳句	膝の上嫌ひな猫と日向ぼこ	一匹の火蛾胸中にもて余す	目覚めれば吾に澄みわたる残る月	やぶ入りや一番風呂がこそばゆい	コハクチョウ風を畳みて湖に落つ	ハーブティー後の月待つ会話かな	団栗や足るを知りたる齢かな	可惜夜や天地透ける月明り	十三夜人それぞれの出入口	畳踏む郷の足裏や盆の月	初産の妻は産み月卯月かな	美少女の睫毛迫るや赤い羽根	月見酒丸く収まる痴話喧嘩	月白や不良仲間に呼び出され	かまきりの悲しい性や生と死と	色ヶ浜の卯波に映る月いくつ	己が身の重力抜けし銀河の夜	高僧の立ち居振舞盆の月	山の端に筆ととのえて月を待つ	浄土へと朧をぬけし夏の月	改元を二度経て平和の蛩舞ふ	無事なるを我に囁く秋牡丹

No.	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132
俳句	月見せん母の遺愛の杖ついて	散骨の船小さく揺れ昼の月	この浦にわが赤子ゐる春の月	女湯の妻の声聞く星月夜	月の雫一滴落ちる涙かな	オルゴール壊れて鳴らず月明り	リラの香に誘われ読むや若菜集	恋しいや繁みに咲けし野姫百合	名月や戦禍そのまま照らしをり	譲られて座り戸惑ふ鬚の秋	煌々と世界を照らす謎の月	月世界想像絶し見上げおり	月目指すロケットに夢膨らみつ	同じ月如何に被害地照らされし	青地球廃虚のガザに盆の月	人生は答えなき日日月月夜	原発の大義を糾す秋の潮	大根播く芽生えぬ種の声かすか	秋の蚊の小さきドローン音もなく	ガザといふ奈落の底の秋の飢餓	六までは数へられる子絵双六	観月の勾玉池や舞楽の音

No.	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154
俳句	蜜豆や娘に意見できぬ父	虚子立子をりさう月の由比ヶ浜	山車六基い並ぶ間より金風	敬老日とまどひ貰ふ記念品	人去りし氣比の松原十日月	事もなく二百十日の過ぎ去りし	バスを待つ有明月と話しつつ	目で見ても清しきことば十三夜	月光に独り校舎を戸締りす	月満ちて女児誕生の吉報来	待ち人に大きく振りし夏帽子	一生が一筆書きの蛍かな	幸せの形夫婦で月を待つ	故郷の空を貸し切る月今宵	帰燕かと蕉翁杖を措かれけり	豊秋や末社の一は猿田彦	月ロマン降りて来たかと水鏡	眉月にこっそり鍵を預けよう	赤とんぼ地球離れる覚悟かな	笙のごと鳴きっぱなしの虫の声	波蘭の孤児救ひし国は稲穂波	ポーランドの遠足の子らコンニチハと

176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	No.
人道の港爽やかコンサート	芭蕉像A Iの世の月仰ぐ	身の内の鈴の震へる月天心	水着干す雲一筋の日本海	雨降れどふはりふはりと秋の蝶	コスモスの揺らいで風のそよぎけり	仲秋の月と語らふ色ヶ浜	深川の月を敦賀に仰ぐ旅	今はまだ基地の灯らぬ今日の月	てんでんに鳴いて調う虫の唄	月光を運べる水に手を浸す	逝く春や藍色深き墨流し	吾が影の濃くつきまとう暑き秋	赤とんぼ記憶の中の道ひとつ	足音のゆつくりと来る月夜かな	月光を握りしめんと赤子の手	岩魚焼き暗がりの路下りて来し	星月夜白川郷は閑かなり	裏戸開け月光入れて母洗う	桐一葉子等見送りてまた独り	清流の調べ訝す秋の宿	桐一葉朝倉五代夢の跡	俳句

No.	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198
俳句	雁渡る格差社会を無縁とし	シャワー浴ぶ修羅も流して星涼し	魂の遠隔操作曼珠沙華	魚河岸の啖呵めく声残る月	句座果てし昂ぶりのまま月の帰路	ウクライナ成り歩も秋の千日手	千畝の港異色なる月今宵	本心が隠れる秋の衣替え	今年米夜通し唸る乾燥機	収まらぬ残暑のひと日鯨幕	水中花火海ある活生食み出して	川音の川いっばいに秋静	溽暑の鎖骨むきだしの昼餉	姉と在るこの安らぎの秋深し	GPSでは追跡できぬ神の旅	AIをあいと読まれし敬老の日	名月や心素直になりてをり	流灯会母のだんだん遠くなる	古戦場の盛衰語る曼珠沙華	紺碧の空に小さく燕去る	仲秋の皆既月食ご馳走さま	仲秋や猛暑忘れの日々送る

220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	No.
秋雲のそこはかとなき模様替え	スニーカー千せばちろがまぎれけり	新幹線終着駅は良夜かな	我が人生凡々と生き小望月	賑賑し秋の膨らむ農舎かな	句に出合い句に生かされて秋灯	海原に光る道付く良夜かな	名月のゆらりと渡る日本海	金と銀あやかりたいな老い二人	月旅行孫に託して寝る平和	吹き飛ばす屋根に駿河の野分立つ	うぶすなや二百十日の爪の痕	千枚田被災乗り越ゆ竹の春	満月や両部鳥居は仁王立	小流れの葉裏にすぎる秋螢	肩薄き夢二美人や眉の月	盆の月父恋ふ終戦八十年	嫁ぎ来し青きうなじや牽牛花	やや小ぶり隠し田の稲架生きてをり	茹で上ぐるばあばの手製衣被	十五夜や俳句生活語り合ふ	不易流行九十九橋なる望の月	俳句

242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	No.
蔵の箱固く結ぶや今日の月	遡上する魚の震へや今日の月	商いが話のはじめ端居かな	大花野行けよと縄の道しるべ	朝光やかからす蜻蛉の影持たず	泰国の大河に浮かぶ月の舟	もうだれも採らぬ民家の熟柿かな	免許証返納松手入最後	いくつかは曲がりし影や麦を踏む	今日の月亡父の愛でしものうち	寒月の星遠ざけて響きけり	寒月や解体近し鄙の家	師と句友あまた逝きたる花野かな	供華燃せし句の残る初月夜	行く雁の島の原生林を越ゆ	月代の嘗て空襲染まりかな	松手入れ俄庭師の思案顔	有明の月に囃されジョギングす	組体操一氣にくずれ鰯雲	卒寿にも志あり月仰ぐ	秋日和年縞の湖風わたる	秋蝶眼が追いつかぬ乱高下	俳句

No.	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264
俳句	縁に上る跣美しきとほめらるる	しゃぼん玉吹いて搦めず行つちやつた	街残暑階段長き歩道橋	秋の蚊の車の中で待ちゐたり	敦賀湾の両岸繋ぎ月の道	波の綺羅底に敷き詰め瀬の澄めり	ワタシワガママあなた背高泡立草	あるいはどこかで見ている気もする月	あの句会「月ですよー」がまた話題	月光はメスフラスコに受胎する	十六夜や孤高の光地を占めて	望月の芝に眠れるゴルフ玉	村里はどこも早寝や弦の月	巾着に紅かくしおり敬老会	喧騒の果ての静けさ真夜の月	穂芒をいけて開店道の駅	満の月棚田千枚静もれる	夫は夫吾には吾の夜長かな	星月夜客はひとりの最終便	人生の岐路幾度か夜半の月	群青の闇に心酔星月夜	一本のバナナのごとき今日の月

286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	269	268	267	266	265	No.
恙がなく生きて二人で薔薇植樹	銀杏散る今は生家も四代目	みどり児の全身で泣く青葉風	月の道我に付き添う影一つ	満月やシルクロードの手掘井戸	祈祷師や満月の夜のシャングリラ	月ぬ夜の献花の列の靴の音	真夜中のベランダ猫と赤き月	放棄田の腰掛石や盆の月	来し方を妻が呟く眉の月	文楽の人形変化秋の月	流灯のひとつ加はり盆の月	秋の声写経の筆の先までも	待宵や病床の窓わずか開け	浦曲なる白砂青松秋澄めり	月明に渡る白帆や気比の海	母卒寿菊の節句の入院日	焼き討ちの裾野を蜂起彼岸花	外つ国へ向かふ航路を月の道	鯉群れて揺るる星空水の秋	里祭り褪せし猿ぼぼ揺れやまず	三日月の薄雲を脱ぎ金色に	俳句

308	307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	No.
自転車のカゴいっぱい泥大根	老牛の最後のお産星月夜	姑の鏡台古き天瓜粉	夫言ひし一雨ごとに秋になる	夫婦愛高めるための炭を継ぐ	こっそりと銀河を入れて母洗う	おかわりのぼくが植えたよ今年米	満月や見ゆる病窓闇遠く	田仕事の終えてほうびの星月夜	名月や新幹線の音ざめく	撫で艶の賓頭廬撫づる豊の秋	日本海の風へ段稻架低く組む	天狗党の越え来し峠銀河濃し	不夜城の喧騒を抜け帰省せり	足裏に川底さぐり鮎を釣る	餅肌の嬰に手ちから天花粉	届きたる前撮写真月明に	秋分や柱時計の電池替ふ	万却の星屑さやぐ天の川	天の川いつもどこかに戦あり	漁火へ真直ぐ続く月の道	月の夜へ浮かれ出でたる獣かな	俳句

330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	No.
産小屋をふはりと覗く雪ばんば	月代の方へ復元櫓かな	赤のまま寡婦となりしと人伝に	十六夜の村のはづれの塗師あかり	秋高し更地に伸びるビルの影	一人居の増えたる里や星月夜	苔むした地蔵の頭鳥交る	ビル街に作り物めく月上る	水門に晩夏の月の細く出づ	ひぐらしの森に日暮れのひかり射す	月光の差込む窓に親しめり	風入れる窓へどこかの秋風鈴	月に舞ふ一差し銀の舞扇	名月を浴びて出窓の月見台	一輪の花影揺れて月の窓	弦月や真珠眠れる青戸浦	秋の夜のラジオの声の清みにけり	月見れば大きやかなり越の道	色深き小田を見放くる案山子かな	暫しとて見上げてゐたり月の蝕	無月なり何度も施錠確かめる	今年米三和土にドサリ積み上げし	俳句

352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	332	331	No.
夜の長し角より埋めてゆくパズル	喪の家の底紅今年紅ひそか	浦人の漁網繕ふ秋暑し	喪の家に車椅子ある晩夏かな	尊しや患者乗すへり秋の雲	追悼展月ある葉書久里洋二	凧ぎ暮るる拉致の海境終戦忌	白山へ天領の空鷹渡る	秋潮や節理の底も神の域	神木の一樹が死界村芝居	ゆったりと祖母は銀河へ戻る途中	のんびりと秋野に溶けるまで歩く	月涼し工作用意明日孫来	老いるのに作法はいらぬ今日の月	深更の厨に月の光あり	句会果つ月の光のしらじらと	掛け声が全員違う天道虫	飲兵衛を家まで送る冬の月	寝待月招きて御伽抱き枕	氣比の雲月に行く手を譲りけり	氣比鳥居旅する月の一休み	立待の月や松原見え隠れ	俳句

374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361	360	359	358	357	356	355	354	353	No.
板塀に潮の香残る夏の果	枯蓮の動かぬ水の昏さかな	華麗なる花卉に齒形かたつむり	小望月見入る子どもら明日は雨	この土地に少し馴染んで良夜かな	月上る昨日と違ふ所から	群青の端から覗く名月かな	夕月夜教えてほしい彼は元気かと	無月にて吾子の気がかり浅からず	月の顔ウサギがいると指さす吾子	豊漁の匂ひも旬や秋刀魚焼く	枝豆や採れ過ぎといふ貰い物	夕月に心覗かれ見透かされ	満月や家事早々に空仰ぐ	友のこと月へ願ふや雲動く	小さな手の小貝のみやげ秋日和	秋桜産小屋の戸をそつと閉め	月清し宴のあとの帰り道	噴水の勢ふ穂に乗る秋の雲	蛸の呼び合うて山暮れゆけり	東京もキエフも差無き望の月	帆柱の一つ一つに秋夕焼	俳句

384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	No.
母の背をさする縁側草もみじ	籐寝椅子老父の膝の赤子かな	爽やかな和紙の手紙を頂きぬ	じっくりと煮込むシチューや秋深む	喜寿傘寿語るバス停赤とんぼ	米寿の朝ざくろの笑い聞いたよな	秋渇京生菓子に季語いくつ	月代に爪を掲げる赤手蟹	錆びし鉄路一本道や草の花	初鴨の声の消えゆく夕日中	俳句